季節は巡る

ヒロシ

この世界にある命や活力、エネルギーの最大量は決まっているのかもしれない。学校へワクワクしながら通う元気な子供や、張り切って会社へ向かう新社会人や、暖かな陽気を浴びてグングン成長する草木にエネルギーが注がれるこの季節、春。私は力を出すことができない。
パジャマ姿のままベッドにくたりと横になって部屋を眺めていた。薄いカーテンを優しく通る春の日差しがぼんやりと部屋を明るくしている。
春は私にもエネルギーを注ごうとしているのかもしれない。カーテンを開けて、眩しすぎるほどの光を身体いっぱいに浴びれば元気になれるのかもしれない。でも私は横たえた体を起こすことができなかった。
枕元にある携帯電話を手にし、充電ケーブルを繋げたまま操作しメールフォルダを開く。
「じゃあまたね、おやすみ」
もっともっと続けていたかったけれど、克也が「んじゃ俺そろそろ寝るわ」と切り出したので少し残念に思いながらも返信したメールが、最後にポツンと表示されている。
送信した後、虚無感に襲われた。公園に忘れられたサッカーボールが雨に打たれ風に吹かれ行き場を失っていくように、私は不安になった。「おやすみ」の一言が戻ってくるだけで、私は安心して眠ることが出来るのに、携帯電話は冬眠した昆虫のように私の手の中でひっそりとしていた。もしかしたらと思い、何度もディスプレイ見て電波の状況を確認したりメールを再受信してみたりしたが、着信を告げることはなかった。いつの間にか眠りにつついた私は、何度か夜中に目覚めては携帯電話を見たけれど、今の時刻を知らせる表示以外はなにも変わっていなかった。ボールは夜闇に転がったまま、持ち主のいない朝を迎えた。

「おはよう」
文字を入力したが、その後に何も書くことがない。
これを送信して克也が戻ってきたら、私はきっと起き上がれる。でもいつ戻ってくるかわからない。それまでの間、私はきっと今以上に不安になる。
4文字がとても頼りなく見え、削除した。
胸がギュウギュウと圧迫されて苦しい。
もう何度こういう経験をしたのだろう。これから何度こういう経験をしていくのだろう。
もし克也と確実に繋がることができるようになったら。毎日毎日、眠る前に克也のカゴに私のボールをしまってもらえたら。
私は再びメール作成画面を開いた。
ゆっくりと2文字だけ入力し、画面を眺めた。胸の中にある無数の想いはたった2文字で表せる。

驚かないでね、克也。

送信ボタンの上に乗せていた指を押し込んだ。「送信中」の画面が時刻表示に変わったのを確かめて、そっと目を閉じた。携帯電話を両手で包み込み、トクントクンと鳴る胸に寄せた。

完